

平成筑豊鉄道の成り立ち

戦前、日本最大の産炭地であった筑豊には、石炭輸送のために様々な鉄道会社が設立され、競い合うように路線を敷設していました。現在、平成筑豊鉄道として運行されている田川線、伊田線、糸田線の3つの路線も、こうした時代の中で、複数の鉄道会社によって建設された路線です。

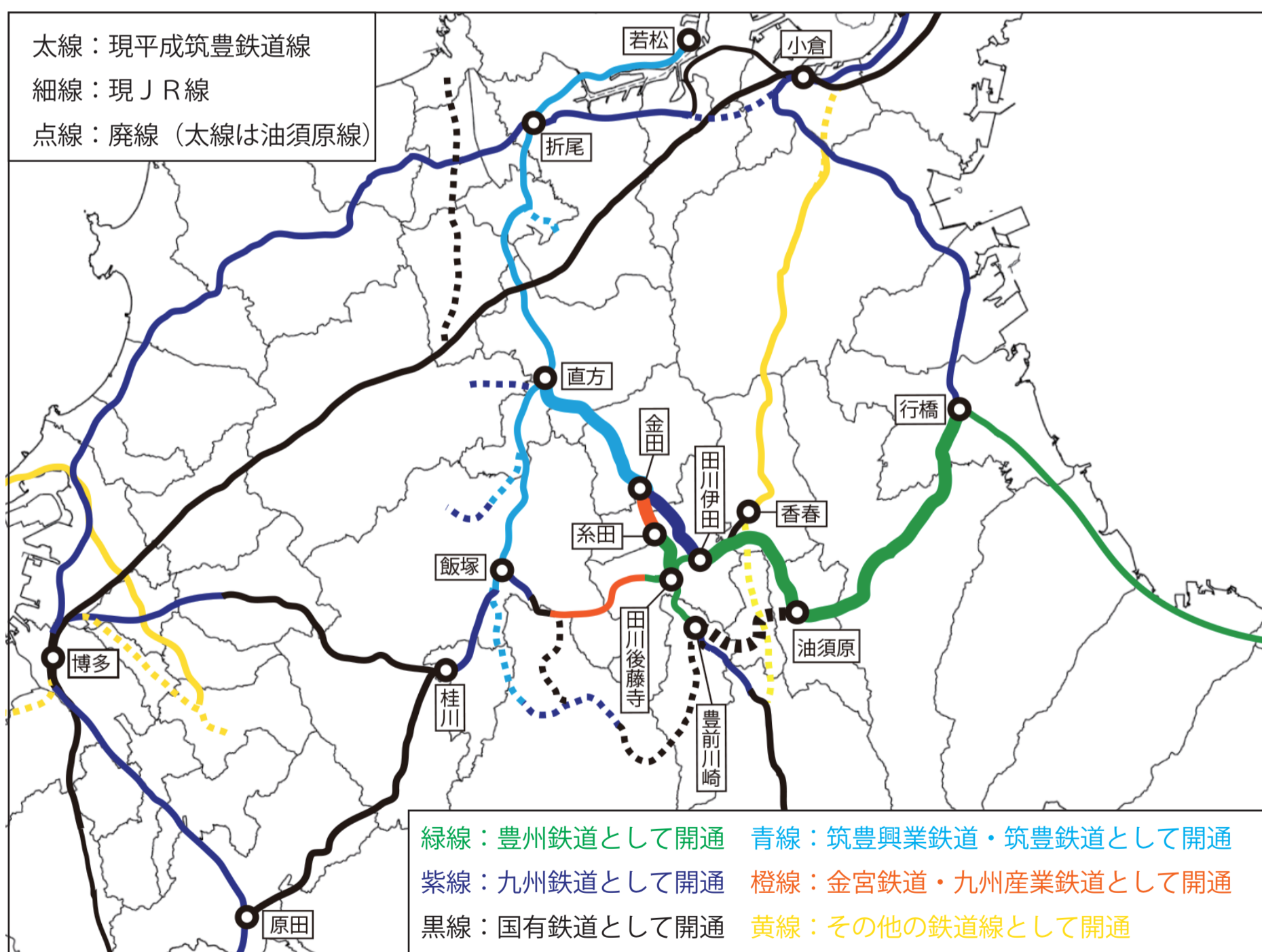
まず明治26年(1893)、筑豊興業鉄道(後に筑豊鉄道、現在のJR筑豊本線など)により、伊田線の直方～金田間が開通します。明治30年、筑豊鉄道は九州鉄道(現JR鹿児島本線など)と合併し、2年後には伊田線の金田～田川伊田間が九州鉄道の手によって開通しました。

一方、田川線は全線が豊州鉄道の手により、明治28年に開通します。この鉄道は田川から周防灘方面への石炭輸送を目指し、田川線開通後に現在の糸田線糸田～田川後藤寺間、日田彦山線や後藤寺線の一部を建設します。さらに現日豊本線の一部も敷設した後、明治34年に九州鉄道と合併します。九州鉄道はその後、明治40年に国有化され、路線は国有鉄道の一部となりました。

最後に開通したのは糸田線の金田～糸田間で、昭和4年(1929)に金宮鉄道として開通した後、九州産業鉄道、産業セメント鉄道を経て、昭和18年に国有化されています。

こうして国有鉄道となった3路線ですが、エネルギー革命による石炭輸送衰退や、国鉄改革に伴う路線網の見直しの中、福岡県および沿線自治体等が出資する第三セクター鉄道として再出発することになりました。そして平成最初の年、新たに平成筑豊鉄道に生まれ変わり、現在も地域の人々の鉄路として輸送を続けています。

平成筑豊鉄道と周辺の路線網



※図中の駅名は現在のものであり、開通時は違う駅名であったものがあります。

※旧国鉄線に連なる旅客線のみを掲載しています(貨物線及び西鉄線、地下鉄、モノレール等は省略)。